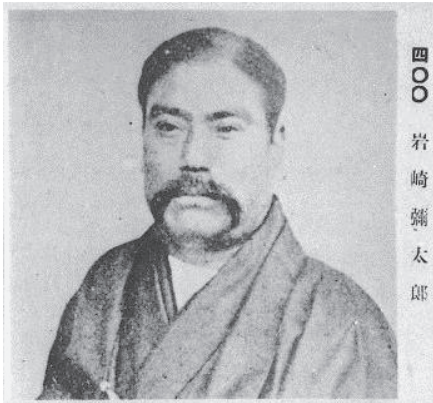


“この人に学ぶ”

第6回 岩崎弥太郎



全管連 技術参与 小泉智和



岩崎弥太郎（国立国会図書館蔵）

頑固者だが憎めない土佐のいごっそう
岩崎弥太郎は、激動の幕末から明治にかけて、苦勞し乍らも時流に乗り、明治3年（1870）、三菱創業の九十九商会を立ち上げました。150年前のことです。

たった数隻の船を運行させる海運業者が、創業家4代（弥太郎・弥之助・久弥・小弥太）が経営トップとしてかじ取りを行い、明治・大正・昭和を通じて海から陸への事業を拡大、三菱財閥を築き上げました。

西南戦争、日清・日露戦争、満州事変、日華事変、太平洋戦争を経る中で、三菱は「政商」、「軍の御用商人」と言われるようになりました。

戦後、三菱・三井・住友・安田、古河、森村といった財閥＝同族によって出資、支配される企業グループは解体されましたが、グループ各社は独立した会社とし

て再出発しました。

今日、三菱は、「三菱金曜会」27社及び金曜会を含む「広報委員会」37社を中核として、所属企業数4,000社超、従業員数87万人超を数え、発展を続けています。

○岩崎弥太郎の名言

先ず最初に岩崎家の家訓、弥太郎が大切にした賢母美和が述べた言葉を紹介しておきましょう。

- ・人は天道に背かざること
親たるものは常に子に苦勞（苦勞）を掛けざるやうに心掛くべし
他人の中言（中傷）を聞いて我心を動かすべからず
一家を大切に守るべし
無病の時に油断すべからず
富貴になりたりといえども雖も貧しき時の心を忘るべからず
人たるものは常に堪忍の心を失ふべからず

以下は、弥太郎が述べた言葉です。

- ・小事にあくせく齷齪するものは大事ならず
よろしく大事業経営の方針をとるべし
- ・部下を優遇するにつとめ
事業上利益は なるべく多く分与すべし

*「三菱蒸気船会社」の社則では、「全責任は我にあり」、「会社の利益は社長にあり」としています。

- ・創業は大胆に 守成は小心たれ
- ・樽よりくむ水にまして 洩る水に留意すべし
- ・機会は魚群に同じだ
はまったからといって網を作ろうとするのでは間に合わぬ
- ・人間は一生のうち 必ず一度は千載一遇の好機に遭遇するものである
しかし凡人はこれを捕らえずして逃してしまふ
古語にも「機を知るは 夫れ神か」とある

○岩崎弥太郎の生涯

天保5年(1835)、土佐国(高知県安芸市)の地下浪人(郷土の株を売却した者)岩崎弥次郎の長男として生まれました。幼い頃から文才を発揮し、14歳頃には藩主に漢詩を披露し文才を発揮しています。

21歳の時、学問で身を立てるべく江戸に遊学しますが、父が喧嘩で投獄されたのを知り帰国、父の冤罪を訴えたところ弥太郎も投獄されてしまいました。

出獄後村を追放されますが、25歳の時、後藤象二郎の口添えで土佐藩の藩政改革推進者吉田東洋が開いていた塾に入塾します。

安政6年(26歳)、東洋の推挙で藩の最下級の職に就き、長崎へ派遣されました。しかし、藩費遊蕩・資金がなくなり無断帰国してしまったことにより、お役

御免となります。

27歳で郷土株を買い戻し、29歳で結婚しました。

郷里でくすぶっていた弥太郎ですが、慶応3年(34歳)、後藤象二郎から藩の商務組織・土佐商会主任(長崎)を任せられます。

同年、藩は長崎で亀山社中を立ち上げていた坂本龍馬に対し脱藩を免じ海援隊隊長を、中岡慎太郎にも脱藩を免じ陸援隊隊長を命じています。海援隊の経理は弥太郎が担当。

慶応4年(明治元年)に土佐藩御用の海援隊と土佐商会は解散します。弥太郎は開成館大阪出張所(大阪商会)に移ります。

明治3年(1870)、仲間を募って九十九商会を大阪に設立(三菱は、この時を以って三菱の誕生としています)→明治5年三川商会と改称→明治6年、三菱商会と改称、この時から船の旗印に三菱のマーク・スリーダイヤを掲げるようになります。

明治7年、本拠を東京へ移転→明治8年、海運部門を郵便汽船三菱会社と改称

会社は、明治7年の佐賀の乱、それに続く台湾征討での軍事輸送、明治10年の西南戦争でも輸送業務を独占して大きな利益を上げ、弥太郎は「国あつての三菱」と表現するようになります。

その後、明治15年に設立された三井系国策会社共同運輸会社と熾烈な競争を続けます。

明治18年、岩崎弥太郎は胃がんにより、50歳の生涯を閉じました。

この年、政府の仲介で郵便汽船三菱と共同運輸は合併し、日本郵船会社が設立されました。



明治10年頃の三菱幹部（三菱資料館蔵）

○岩崎弥太郎の経営

岩崎弥太郎は、同時代の渋沢栄一が述べる、会社は近代的な株式会社によって運営されなければならないとする「株式会社論」に対し、経営は専制で行わなければならないとする「個人独裁経営論」を主張していました。

実権を社長に集中し、役員・社員がその下に結集し一丸となって事に当たる「組織の三菱」を目指したのです。

負けず嫌いで戦闘的な弥太郎でしたが、一方では、情報収集に力を入れ、慎重型の人間でした。それだけに、チャンスを逃さない用意周到な男でもありました。

前近代的な経営者と思われがちですが、早くから英会話の必要性を感じ、弟弥之助を明治5年にはアメリカ留学させていますし、外国人を多く雇用し社内での英語教育にも力を入れ、また早くから近代的複式簿記も取り入れています。

そして、「よく人材技能を鑑別し、すべからく適材適所に配すべし」とし、人

材確保策として、東京帝大や福沢諭吉が推薦する慶應義塾の学生を多く採用しています。

しかしして、彼は「信用が第一」と述べています。地域に根差した水道工事店を経営していく上では、弥太郎が大切にしたこの言葉が何よりも求められていると思います。

○岩崎家ゆかりの地巡り

岩崎弥太郎ゆかりの地は、高知、長崎、大阪とありますが、ここでは岩崎家ゆかりの地・東京をご案内します。

明治7年、三菱の本拠を大阪から東京南茅場町（現・日本橋茅場町）に移しますが、直ぐ近くの江戸橋に郵便汽船三菱会社の荷捌き場が設けられました。この地には、現在、三菱倉庫本社のビルが建っていますが、1階の「江戸歴史展示ギャラリー」で町の歴史や倉庫業のなりたちなどを知ることができます。

上野池之端は、三菱の岩崎家本邸があった場所です。現在残る建物は、弥太郎の長男久弥時代のもので国の重要文化財に指定されています。隣接地は、久弥の子・彦弥太の邸宅跡地で現在「三菱資料館」があり、三菱創業以来の資料を保管・展示しています。

三菱村の大丸有（^{だいまるゆう}大手町・丸の内・有楽町）は、2代目社長弥之助が明治23年、国の陸軍跡地を購入したもので、今日たくさんの三菱グループの会社ビルが立ち並んでいます。旧三菱1号館（再現）、明治生命館は、国の重要文化財に指定されています。

岩崎家は、六義園や清澄庭園などを別邸にしていたが、現在ではその多くは公園として開放されています。高輪の関東閣は、三菱各社の迎賓館として利用されています。六義園近く都立染井霊園入り口付近には、岩崎家（弥太郎）の墓地があります。

なお、二子玉川の静嘉堂庭園は、第2代社長岩崎弥之助とその長男小弥太のゆかりの地で、岩崎家（弥之助）の墓地もあります。

管工事組合の皆さん、その家族の方が

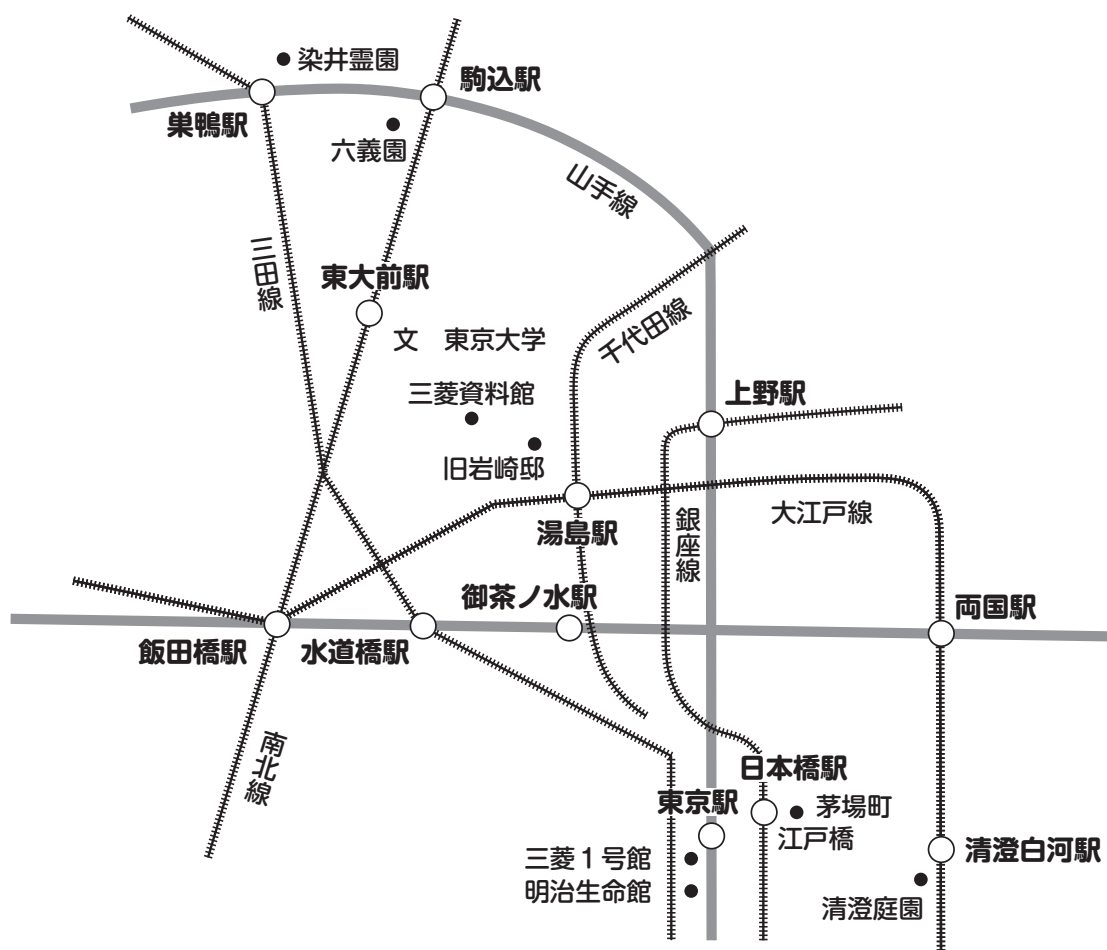


旧岩崎邸庭園（ウィキペディア）

東京へ来られたら、小泉がご案内します。

申し込み：全管連事務局 所要1か所

1～2時間 無料



* 参考資料

「岩崎弥太郎伝」

太田 尚樹著 角川学芸出版

「竜馬“海援隊”と岩崎弥太郎“三菱商会”」

童門 冬二著 朝日新聞出版

次号では、森村市左衛門をご紹介します。